

B-3. 「カブトムシのなぞを探れ！」

若葉台保育園(福島県いわき市)

[5歳児]

事例① 「発見!カブトムシ!」「ぎゅうふんって何?くっせー!」(3月31日・木)

5歳児 保育士

石拾いから始まった畑作り。荒地を畑にするための牛糞撒きを、子どもたちにもやらせてもらうことにした。畑に着いたら黒い山があり、「これ何?」と不思議がる子どもたち。臭い牛糞を嫌がるかと予想していたが、「くっせー!」なんて言いながらも、大事な畑の栄養になると知って、はりきって取り組む姿が見られた。そして、その牛糞の中に、ミミズやカブトムシの幼虫を見つけ、大喜びの子どもたち。幼虫は保育園に持ち帰って育てることにした。畑作りと並行して、この日からカブトムシの飼育もスタートした。

「何で畑にウンチを撒くか知ってる?」という保育士の質問に、「知ってる!!あのね、ウンチって栄養になるんだよ。」とKK。「野菜が元気になるんだね。」とYH。全員での牛糞まきが始まった。「くさいね〜。」「いっぱいあるね。」と話しながら、それでも張り切ってスコップに山盛りの牛糞を運ぶ5歳児であった。

自分たちの畑の栄養のため頑張る。意欲の高まり。

途中で土の中にミミズを見つけ、「うわっ!ミミズ!」と男児数人がスコップでミミズを突き始めると、「かわいそうだからやめろよ!」とSR。「いっぱいミミズいるねー。」とTM。「本当だね、こっちにもいる。何でミミズいっぱいいるのかな〜?」KT。「ウンチの栄養があるからだよ!」とMK。ただの牛のウンチも、今回の活動を通しては畑作りにはとても大切なものだと思えることができた子どもたちだった。「見て!見て!カブトムシの幼虫!」と一人が見つけると、「もっというかもよ。」と幼虫探し。10匹ほどの幼虫を見つけ大興奮。保育園で育てることにした。

事例② 「うわー、さなぎになった!さなぎ見るのおれはじめて!!」(6月15日・水)

4・5歳児

畑作りの途中で見つけたカブトムシの幼虫が、さなぎになったのを初めて発見した日、子どもたちは大興奮。触りたい、手のひらにのせてみたい、という欲求を必死に抑え、さなぎの姿に見入り、その成長・命を大事に見守る子どもたちの姿があった。

畑で見つけたカブトムシの幼虫を大事に見守り、成長を楽しみにしていたさくら組の子どもたち。部屋に入ると真っ先に、幼虫を見に行くほどの熱狂的な興味・関心を示す男児数名。毎日見ているだけあって、さなぎになったのを第一に発見したのも、その数名の男児だった。

自主的にさなぎの成長を大事にする心

「先生!先生!これ何?さなぎ?さなぎだよね?」と大興奮して、飼育容器ごともってくる。その声に、数名が集まってくる。「うわー、ほんとだ。」と保育者も心から感動し共感する。「うわー、ほんとにさなぎになったんだ。さなぎ見るのおれはじめて!」「ほんとに茶色いよ。」「触っていい?」というYM。「人間が触っちゃうと弱るんだよね。」と保育士。「じゃ、触んなくていい。見るだけでいいよ。」「だって、さなぎからほんものカブトになるんだもんね。」自分の欲求を必死に抑え、心からカブトムシを大事に思い、育てて欲しいと思う気持ちがうかがえた。子どもの気持ちが保育者にも伝わり、子どもたちが上手く成虫に育て上げられるよう支援していこうと、強く心に思った。



事例③ 「カブトムシのなぞを探れ!!」(7月29日・金)

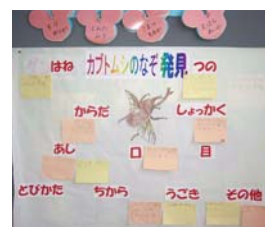
5歳児

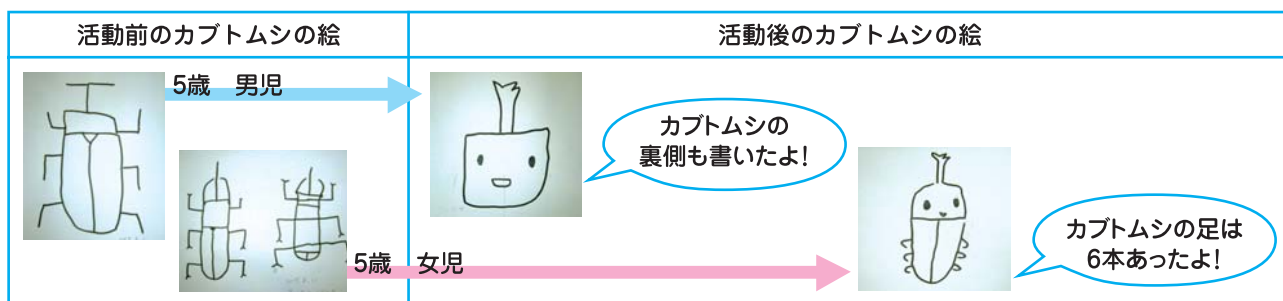
待ちに待った成虫。こどもたちとカブトムシのふれあいが始まった。触れることでよりリアルに、そして、より身近になったカブトムシ。カブトムシのなぞも、遊びの中でたくさん見つけ、それをカブトムシのなぞ発見図にまとめた。

上手く成虫に育て上げた子どもたちは、カブトムシへの思いもひとしおで、自主的に意欲を持って世話をしている。色々な情報を得ると、自分が知ってることをみんなにも知らせ合っている。直接手に取り、触れ合う子どもたちは、生き生きと楽しそうだ。

カブトムシのことをもっと知りたい意欲の高まり

ある時、2人の男児が言い争っていた。カブトムシはおしっこするが、しないかで意見が分かれてもめていたのだ。「おれ、だって見たことあるんだよ。」YY。「だって、虫ゼリーしか食べてないから、おしっこ出るわけないでしょ。」とSH。そんな子どもたちのやりとりから、保育者は、ダンゴムシとミミズの秘密を探ったことを思い出させる。「そうだ、カブトムシのヒミツもみんなでそうぜ!」と張り切るYY。そうして、カブトムシの秘密探しが始まった。図鑑を見たり、実物をルーペで見たり、ビデオを見たり、子どもたちで進める活動には活気がある。そうして作り上げたカブトムシのヒミツ図は、子どもの言葉でつくられた生きたヒミツ図となった。





事例④ 「カブトムシはいつまで生きる?命のつながりに気付く」(8月22日・月)

5歳児 保育士

「カブトムシあんまりエサ食べないよ。」と心配そうなYY。「なんか、元気ないよね。」と会話が聞かれた次の日、カブトムシが死んでいた。カブトムシの死に直面し、驚き、悲しむが、「どうして、死んじゃったのかな?」みんなで考えてみた。



毎朝、登園してくると真っ先に、カブトムシを見に行くYY。「どうして元気がないのかな?」「寒かったのかな?」「あんまりさわりすぎだったかな?」と心配していた。翌朝、動かなくなったカブトムシを見つけた男児数名は、神妙な面持ち。「カブトムシ死んじゃった・・・」「でもさ、

かわいがっていたものの死に直面し、考える。



しょうがないんだよ。」「どうして、死んじゃったのかなあ。」沈んだ会話が続く。

かわいがっていたものの死に直面したこの機会を捉え、命について考えるいい機会だと思い、この会話をクラス全体でも取り上げ、みんなで話し合ってみることにした。

命のつながり、大切さを感じて欲しい。

死んでしまったカブトムシを囲み、「図鑑にもってたよ。夏が終わる頃には死んじゃうって。」「冬の間は寝てる(冬眠)んじゃないの?」など、核心につく意見も出てくるが、みんな本当はどうなのかはっきり答えが出せない。

保育者が用意しておいた、カブトムシの一生についての提示物を子どもたちに見せる。ひと通り子どもの疑問に答えながら、説明をしていくと、いつも保育者の話を聞かないFKが、「死んでも、卵を残すんだ!」と発言。みんな、納得。そうだよ、そうだよ、という雰囲気漂う。「そうやって、命はつながっていくんだよ。」「みんなも、お母さんから生まれ、お母さんはおばあちゃんから生まれ、ぼくたちも大人になったらお父さん・お母さんになるんだよ。」と保育者が伝える。「うん。つながっているんだね。」「ぼくは、お母さんのおなかでいたんだよ。早く出たいよって、いっぱいおなかキックしてたんだって。」など、自分の生命についても考えるいい機会となった。「卵が生まれたら大事に育てようね。」とEA。育て方の勉強をしようと、心に強く誓った保育者だった。

考察

農園作りをメインとした活動の中で、自然に出会える生き物との関わりは、子どもたちに大切なことを教えてくれている。おたまじゃくしがカエルになると、カエルって何を食べるのか?から始まり、自分たちで図鑑で調べたり、生きている虫を捕まえてはエサとして与え、同じ虫でも「アリは好きじゃない」「クモやバッタが好き」と自分たちで試し・気付くことを自主的にしていた。

牛糞の中にいたカブトムシの幼虫を育てることで、生き物への関心・命のつながりの大切さなどに、自分たちで気付くことができた。

ポイント

大事な畑に必要な牛糞と分かっても、未知のもので親しめるものではなかったと思われます。しかし、そこに知っている虫や幼虫を見つけることで、牛糞への関心も活動意欲も高まり、「牛糞は畑作りに大切な栄養があるもの」という考えをもつことができました。そして、持ち帰った幼虫を飼育し成長を見守ることで、さなぎや成虫を観察して確かにカブトムシの幼虫であることが分かり、気付いたことや発見を表現する姿が引き出されています。また、観たり調べたりして「カブトムシのひみつ」を探ったことでカブトムシへの親しみは深まり、「エサを食べない」ということに気付きます。「どうして?死んじゃうの?」という疑問をみんなで考え合うことで、新たにカブトムシを調べて理解を深めることになり、卵を残すという命のつながりの大切さに、気付くことができました。